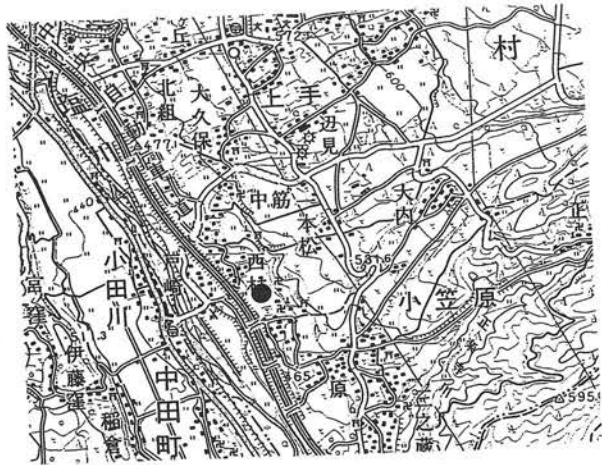


5. ^{みやまだ}深山田遺跡

所在地 明野村小笠原字深山田
調査原因 県営圃場整備事業
調査期間 1998年7月6日～12月17日
調査面積 16,000㎡
担当者 佐野隆



遺跡の立地と経歴

韮崎市藤井平を国道141号線に沿って北進すると、右手に茅ヶ岳の山麓が塩川に浸食されてできた断崖が乳白色の岩肌をあらわにしている。断崖は高さが50mにもおよび、藤井平と茅ヶ岳山麓との行き来を阻んでいる。やがて断崖は明野村小笠原集落あたりで低くなる。このあたりは五反田川が山麓を浸食したため、断崖が削られて、山麓への回廊となっている。国道を右折し三村橋で塩川を渡ると明野村小笠原集落の北端に至る。

深山田遺跡は、小笠原集落の北端に位置する。明治26年の分検図には、遺跡を南北に貫いて古道「穂坂路」の分流「小尾街道」が走る。現在は水田となったが、かつては甲州と信州東部とを結ぶ主要街道であった。おそらく街道の起源は中世初頭かそれ以前にさかのぼるであろうことは、今回の深山田遺跡での調査成果からうかがうことができる。遺跡付近から「じょうかん坂」と呼ばれる小道が塩川へと下り、韮崎市中条の「御牧神社」へと至る。明治末年頃までは、小笠原に入ってくる一般人の通行を許さなかった坂であるとも伝えられ、後院牧「保坂牧」に由来する古道であるとの説もある。

「穂坂牧」は10世紀以降、「小笠原牧」と呼ばれることもあった。一節には小笠原長清が私領化したともいわれているが、真偽は定かではない。『吾妻鏡』によると、建暦元年(1211)は小笠原牧の牧士と鎌倉御家人三浦義村の代官とのあいだで争いが生じ、代官が解任されるという事件が起きている。当時の有力御家人どおしであった小笠原長清と三浦義村とのあいだに争いが生じたと考えるのは不自然であり、公家方と御家人方のあいだに多発した所領争いであったと解するほうが自然であろう。そう解釈すると少なくとも13世紀前半までは、小笠原牧は小笠原氏の所領ではなかったことになる。

遺跡の東側に真言宗「福性院」、曹洞宗「長清寺」の2寺がある。いずれの寺も小笠原長清にゆかりがあると寺伝に伝えられる。寺伝によると「福性院」は、貞観年間(9世紀)に創立、14世紀に信濃守護小笠原大膳太夫政康により中興され、天正2年(1574)に現在の地小笠原字御堂坂下に移したという。「長清寺」は、寺伝に慶長5年創立とあるが、過去帳に「応保二年三月五日生、仁治三寅年七月十五日逝ス歳八十一、法名浄誉栄會……洛東ニ建長清寺又此ニ建ツト云々……」と記され、「当山開基長清寺殿傑翁栄會大禅定門」の位牌と長清の墓とされる五輪塔を有する。

小笠原地区は古代、中世から茅ヶ岳山麓への玄関口のひとつであったらしい。今回の発掘調査では、奈良時代(8世紀)の竪穴住居跡が1軒だけが発見されている。山麓が塩川に浸食され、また造田で遺跡が削平されていることを勘案すると、奈良時代の集落が存在したことも推測される。8世紀代の集落は茅ヶ岳山麓初の発見であり、藤井平に隣接した玄関口としての地域性を示しているといえよう。

この竪穴住居は、特殊な構造を有する。住居の角から角へと対角線上に平らな石が敷かれていた。石は床面と同じ高さになるように、やや埋め込まれており、外見は暗渠のようである。石は住居内のみ敷かれ、

住居北西隅から住居外へと溝が続いている。傾斜地を造成した折にわき出す地下水を住居外に排水する施設のように思われるが、類例もなく定かではない。

平安時代では竪穴住居跡4軒が発見されている。

遺跡の主体は、13世紀から15世紀の掘立柱建物群である。掘立柱建物の柱穴と思われるピットが約4,000基検出されている。柱穴が多すぎて掘立柱建物の組み合わせはにわかに判断しがたいが、3つの群にまとまっているようにみえる。柱穴群の一部を方形に区画するような溝も検出され、時期ごとに変遷しながらの一定の規則性をもって掘立柱建物が建築されていたことが推測される。

こうした柱穴群中より密教法具と思われる銅製椀14個が出土している。重機による表土剥ぎ作業中に発見されたため、詳細な出土状況は分からなくなってしまったのが残念である。銅製椀の発見により、建物群は寺院の可能性も示唆される。

そうした建物群の性格を裏付けるかのように、遺跡からは集石墓2基、火葬墓（火葬施設）4基、土坑墓5基が発見されている。火葬墓2基は時期不明だが、ほかは15世紀代の墓と考えられる。集石墓は、方形に石を無造作に積み重ね、一部に石列、環状石列がみられる。集石中には石材として転用された五輪塔も混じる。集石下部からは方形の浅い土坑が1基検出され、逆さにした火輪が埋納されていたほか遺物は出土していない。人骨は検出されていないが、墓と推測している。集石中より出土した内耳鍋から15世紀後半から16世紀頃と考えている。

土坑墓は5基検出され、うち3基は浅く小さな楕円形の掘り込みをもち、頭骨のみが土葬されていた。頭骨は西面横位で漆を塗った箱に納められていたようである。古銭が4～6枚副葬されていた。この3基の墓は5mの間隔を置いて並んで検出されている。

別の土坑墓からは石鉢が出土している。一辺1mの隅丸方形の土坑には、大小の礫が詰め込まれ、石をもって埋めているかのようである。石鉢は土坑の東端から検出された。人骨は検出されていないが、遺体を西に向けて座葬し、頭部に鍋被りならぬ石鉢を被らせたのではと推測している。

火葬墓4基のうち、2基は石を敷きつめた火葬施設で、人骨が出土している。火葬施設をそのまま墓にしている可能性もある。ほかの2基は火葬骨片が焼土、炭とともに散布しているだけである。現在、長清寺にある小笠原長清の墓とされる五輪塔のうちの1基は、現在の遺跡内にあったものを昭和10年代に長清寺に移したという。当時を記憶する方からの聞き取りでは、五輪塔は火葬骨片の散布が検出された地点付近にあったらしい。今後、五輪塔の形式からみた年代観とともに検討を加えたい。

遺跡からは、ほかに柵列2列、溝8条、竪穴状遺構1基、戦国時代末から近世初頭の石垣4列が発見されている。石垣は大小の自然石を布積み状に積み、隅角部は算木積み状にみえる。高さは1.7mではほぼ垂直に積み上げられている。一部にアカマツの胴木もみられる。石垣は最低2回積み足されている。その積み方の特徴から、戦国時代末から近世前半頃のものと考えられる。

遺物は、奈良平安の土師器、須恵器のほか、中国陶磁（青磁合子片、梅瓶片、椀皿類、青白磁など）、高麗青磁片、瀬戸・美濃、常滑、渥美などの国産陶磁、京都系土師器皿模倣品、在地産土師質土器、内耳鍋、瓦質土器、漆塗木製椀、石像物（五輪塔、石鉢、硯、砥石）、銭貨、木製陽物、各種木製品、加工痕をもつ柱根などが出土している。15世紀の陶磁器などには熱を受け変色したものが散見される。遺跡の一角からは炭と焼土が散布していたことから、火災があった可能性がある。

以上の発見から、深山田遺跡は、13世紀中頃に寺院かそれに類する施設として造営が始まり、複数の建物が建築され建て替えられながら、15世紀中頃に火災により廃絶したと推測される。15世紀代には、寺域に墓



集石墓



長清寺に検出された石垣



石鉢が出土した土坑墓



火葬施設



銅製碗



深山田遺跡全体図

も設けられた。多数の建物跡が想定されることから、寺院のみでなく、宿坊などの付属施設あるいは一般住居なども存在した可能性もあろう。約150年ほどのあいだを置いて、16世紀末から17世紀初頭にかけては新たに寺院が造営されたと考えられる。

遺跡は13世紀中頃から17世紀初頭にかけて、基本的には寺院として存続したものと思われるが、400年間にその性格が変遷したと考えられる。

中世寺院の類型化とその変遷を検討した笹生1997に即して深山田遺跡を検討すると、深山田遺跡の寺院は、特定氏族が氏寺として、あるいは壇越（パトロン）になって建立した寺で、13世紀中頃に建立されたと考えられることから、鎌倉御家人あるいは北条氏関連の氏寺、あるいは彼らが壇越となった寺と考えられる。高麗青磁、中国産青磁など的高級貿易陶磁の大半は、13世紀代のものであり、寺院の背景に豊かな財力を備えた有力者が想定されることも、こうした見方を支持する。深山田遺跡に関与した人物を特定するに足る史料は得られていないが、あるいは小笠原長清以下の小笠原家もそうした可能性のある人物の一人といえようか。

15世紀代には土豪、在地上層農民が寺院の壇越として関与するようになるという。15世紀になって深山田遺跡内に複数の墓が設けられるのは、こうした背景があったと考えられる。

中世寺院は、15世紀後半以後急速に衰退、変貌するといわれる。深山田遺跡でも15世紀に廃絶したのち、再建された様子はなく、戦国末期から近世初頭になってふたたび寺院が創建されるまでの間は目立った遺構もみられない。

調査区東端の石垣は、隣接する曹洞宗長清寺の所有地で発見されている。寺伝その他の古文書によると長清寺の前身は、長昌庵ないし長昌寺と名乗り、天正から宝永年間にかけて寺の築造を繰り返したことが分かる。寺は明和年間に現在地に移築し、古寺跡は水田化された。その一連の記録から、石垣が長清寺の前身の坊、寺を建てるために築かれた可能性が高いと思われる。

このように深山田遺跡は、中世寺院の変遷と近世寺院の登場を今に伝えている。寺院の背景には、それを信仰面から支えた聖職者、経済面から支えた有力者の存在がある。今後の検討ではそうした背景を探り、茅ヶ岳山麓の中世史像を具体的に解明していきたい。

石垣は長清寺壇家、施工区の協力により現地での保存が決まった。近日中に村史跡に指定する予定である。

参考文献

- 笹生 衛 1997 「考古学からみた中世寺院—中世寺院遺跡の分類と変遷を中心に—」『研究報告』第8集 帝京大学
山梨文化財研究所



深山田遺跡全景



奈良時代の竪穴住居